

COIV-19によるパンデミックが発生してから既に3年を経た。収束するという可能性すらまだ見えない状況ではあるが、多くの人々がこの環境に慣れてきていることも事実だろう。本学では遠隔授業がなくなり、オンデマンド授業が一部行われているのみで、殆どの授業が対面授業に戻った。このような流れから教職員に精神的な安息が与えられ、教育と研究に勤しめる環境は十分整ってきている。しかしながら、寄稿数が思いのほか上がらないため、研究論文を容易に作成できる状況まで回復できたわけではないようである。

研究紀要『エレノア』第5号を発行できることに感謝したいが、昨年引き続いて発表できる論文の数は多くない。また、本紀要は、2020年度の第55号を最後に廃刊となった桃山学院大学の『キリスト教論集』を継承する形になってはいるが、桃山学院大学からの寄稿が皆無であったため、論文を集めること自体が難しい状況にある。可笑しい言い方になるが、そのような中で、第5号の発刊に漕ぎつけた次第である。

さて、今回の研究成果には、第1号からご執筆いただいていた、梶田 叡一前学長の論文は体調が芳しくないということで、ご寄稿いただけず非常に残念である。キリシタン達が聖書の物語をどのような理解の上で信仰していたのかを探求する、潜伏キリシタンの伝承『天地始之事』に関する論文のシリーズ第5作目は次回に持ち越しとなった。

湯峯 裕教授の論文「2020年から2022年の世界の激変に考える ―日本における宗教的教養の教育について―」は、ウクライナとロシアの戦争という現実を前にして、根本的な教育について深く掘り下げて熟考している論考である。既存の平和の上に胡坐をかきながら気楽な平和教育を続けてきたことを恥じながら、宗教から得ることのできる日本特有の心の教育を情熱をもって語っている。その理論の中にはキリスト教や仏教の違いからくる日本ならではの無言という語り方にも言及する場面がある。議論や競い合いなどの対立を避けるべきことと、現代教育論の中に蔓延る持続的な思考力や判断力の希薄化や短絡的な思考無き思考に歯止めをかけたいと願っているのである。

次に、オチャンテ 村井 ロサ メルセデス准教授は「複言語環境にある家族とカトリック教会の役割」というテーマで社会調査論文を提出している。

この論文は、新型コロナの影響が薄れ日本に在住する外国人が増加傾向に戻り、日系のブラジル人、ペルー人、フィリピン人などの所謂ニューカマーなどの増加が見られるようになり、移民

第二世代の子どもも増加する中、主にエスニックコミュニティにある第一世代と第二世代のコミュニケーションについて調査したものである。調査方法として、インタビュー形式を用いており、結論として多種多様な調査結果を得ていることがわかる、非常に興味深いものとなっている。

小職の「キリスト教と戦争：栄枯盛衰のグローバリズムと起死回生の正統的ナショナリズム」は、急速にグローバル化が進む現代社会においても戦争が無くならない現実を踏まえて、グローバル化に疑問を呈し世界がひとつの共同体になるというグローバリズムの本質を根本的に問い直す考察である。そこで、グローバリズムの必要性よりもナショナリズムへの回帰を強調している。ナショナリズムと言っても、これはイタリアのファシズムやドイツのナチズム、そして大日本帝国主義などとは全く違うタイプのナショナリズムである。世界中で起こっている紛争、争い、戦争の終焉を願って、ヨラム・ハズニーの著書『ナショナリズムの美德』から大きなインパクトを得ての論文となっている。

以上の研究論文に加えて、本学でのキリスト教講演会の原稿を掲載させていただく。この講演会は、昨今の新型コロナウイルス拡散防止の観点からインターネット配信での講演会になったものである。キリスト教講演会も今回で第5回となった。講師に日本聖公会 中部教区主教であり、立教大学総長の西原廉太氏をお招きした。著名な人物とということで桃山学院教育大学だけの講演会にせず、中学、高等学校、大学の学校法人桃山学院全体における講演会として位置付け、主催を学校法人桃山学院としている。また、動画は2022年7月12日から2023年3月31日までYouTubeによる配信を行った。テーマである「桃山学院と聖公会」を深く掘り下げて解説いただいた素晴らしい講演である。なお、この講演会に関しては桃山学院大学の『チャペル講演会・講話集 出合い』(2022年度 32号)にも同時掲載される予定である。

最後に、この紀要に掲載された論文等の研究成果が高い評価を受けることを願い、執筆いただいた方々および査読等で紀要発行のためにご貢献くださった編集委員の先生方に深く感謝の意を表したい。